

訳注大越史記全書（4）鴻龐氏紀・蜀紀

平 塚 順 良*

（受付 2022 年 10 月 21 日）

【原文 1】

「大越史記外紀全書」卷之一①

朝列大夫・國子監司業兼史官修撰，臣吳士連編②

按黃帝時建萬國③，以交趾界於西南，遠在百粵之表④。堯命羲氏宅南交⑤，定南方交趾之地。禹別九州⑥，百粵爲楊州域交趾屬焉。成周時，始稱越裳氏⑦。越之名肇於此云。

鴻龐氏紀⑧

涇陽王

諱祿續，神農氏之後也

壬戌，元年⑨。初，炎帝神農氏三世孫帝明生帝宜。既而南巡至五嶺，接得嫫女⑩，生王。王聖智聰明⑪，帝明奇之，欲使嗣位。王固讓其兄，不敢奉命。帝明於是立帝宜爲嗣，治北方。封王爲涇陽王，治南方，號赤鬼國。王娶洞庭君女，曰神龍，生貉龍君（按『唐紀』，涇陽時有牧羊婦，自謂洞庭君少女，嫁涇川次子，被黜。寄書與柳毅，奏洞庭君。則涇川洞庭世爲婚姻，有自來矣⑫）。

【和訳 1】

「大越史記外紀全書」卷一①

朝列大夫・国子監司業を務め史官修撰を兼任する，臣下の吳士連が編纂した②

考察してみると，黄帝の時代に万国が建てられたが③，交趾は西南に隔離されて，百越のはるか外側にあった④。堯は羲氏に命令を下して南交に住ませた⑤。この時，南方に交趾の地を画定した。禹は大地を九州に分割し⑥，百越は楊州の境域にある交趾の所属となった。周の成王の時代，始めて越裳氏を自称した⑦。越の名はここから始まる。

鴻龐氏の時代⑧

涇陽王

いみな
諱を祿続と言ひ，神農氏の子孫である。

* 広島修道大学

壬戌、涇陽王の元年^⑨。さかのぼること、炎帝神農氏の曾孫^{ひまご}である帝明が、帝宜を生んだ。間もなくして、帝明は南方を巡遊して五嶺に到達した。そこで嫫仙の娘を迎え^⑩、王を生んだ。王はずばぬけて頭が好かった^⑪。帝明は、彼を特異に思い、帝位を継がせたいと考えた。ところが王は頑なに兄に譲って、命令に従わなかった。帝明はそこで兄の帝宜を後継者として、北方を統治させた。そして王には涇陽王の位を授け、南方を統治させることとした。そこで赤鬼国を名乗った。涇陽王は、洞庭君の娘である神龍を娶り、彼女は貉龍君を生んだ（『唐紀』によれば、涇陽に当時羊飼いの婦人がおり、自分は洞庭君の娘であり、涇川の次男に嫁いたが、離縁させられたと語った。手紙を柳毅に託して、事情を洞庭君に奏上した。このように涇川・洞庭が、代々婚姻関係を結ぶのには来歴がある^⑫）。

【注1】

- ①大越史記… 陳本は大越史記全書外紀につくる。正和本・孫本は大越史記外紀全書につくる。正和本にしたがう。
- ②朝列大夫… 孫本はこの一行を欠く。
- ③黄帝時… 『漢書』地理志八上に「昔在黄帝，作舟車以濟不通，旁行天下，方制万里，画壑分州，得百里之國万区。是故『易』称“先王以建万国，親諸侯”，『書』云“協和万国”。此之謂也（昔黄帝在り，舟車を作りて以って通ぜざるを濟し，旁く天下を行き，方めて万里を制し，壑を画し州を分ち，百里の國万区を得。是の故に『易』に“先王以って万国を建て，諸侯に親しむ”と称し，『書』に“万国を協和す”と云う。此れ之の謂なり）」とある。
- ④以交趾界… 史略に「昔黄帝既建万国，以交趾遠在百粵之表，莫能統属，遂界於西南隅（昔黄帝既に万国を建て，交趾の遠く百粵の表に在り，能く統属する莫きを以って，遂に西南の隅に界す）」とある。
- ⑤義氏宅… 『尚書』堯典に「申命義叔，宅南交（申ねて義叔に命じて，南交に宅らしむ）」とあり，『書集伝』に「南交，南方交趾之地（南交は，南方交趾の地なり）」とある。
- ⑥禹別九州 『尚書』禹貢に「禹別九州，隨山濬川，任土作貢（禹は九州を別かち，山を隨りて川を濬え，土に任いて貢を作む）」とある。
- ⑦越裳氏 『後漢書』馬融列伝の注に『尚書大伝』を引いて，「周成王時，越裳氏重九詎而貢白雉（周の成王の時，越裳氏九詎を重ねて白雉を貢ぐ）」とある。
- ⑧鴻臚氏紀 陳本は鴻臚氏紀につくる。正和本・孫本は鴻臚氏紀につくる。正和本にしたがう。
- ⑨壬戌 (2) 【2】の凡例では，涇陽王について「故紀元与帝宜初年同（故に紀元は帝宜の初年と同じくす）」とあった。『資治通鑑外紀』巻一には「帝直，元年丙子，在位四十五年」とあり，干支が合致しない。
- ⑩嫫 『漢書』地理志八下に「粵地，牽牛・嫫女之分壑也。今之蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九

真・南海・日南，皆粵分也（粵の地は，牽牛・婺女の分壘なり。今の蒼梧・鬱林・合浦・交阯・九真・南海・日南は，皆^{みな}粵の分なり）」とあるように，婺は交阯を含む南方を掌る星である。

⑪聖智聰明 『荀子』宥坐に「聰明聖知，守之以愚（聰明聖知なるも，之を守るに愚を以ってす）」とある。

⑫按唐紀… 唐・李朝威の小説「柳毅伝」のことで、『太平広記』卷四一九に収録されている。なお『資治通鑑』唐紀はこの故事を載せない。孫本・越本1・越本2は唐紀を書名と見なすが，管見の限り「柳毅伝」を載せる『唐紀』という書物を確認できない。唐紀は廣記の訛字と考えられる。

【原文2】

貉龍君

諱崇纒，涇陽王之子也。

君娶帝來女，曰嫗姬。生百男（俗傳生百卵），是爲百粵之祖。一日，謂姬曰「我是龍種，爾是僊種。水火相剋①，合併實難」。乃與之相別。分五十子從母歸山，五十子從父居南（居南作歸南海）。封其長爲雄王，嗣君位。

史臣吳士連曰，天地開肇之時，有以氣化者，盤古氏是也②。有氣化，然後有形化，莫非陰陽二氣也。『易』曰「天地絪縕，萬物化醇。男女媾精，萬物化生」，故「有夫婦然後有父子，有父子然後有君臣③」。然而聖賢之生，必異乎常，乃天所命。吞玄鳥卵而生商④，履巨人跡而興周⑤，皆紀其實然也。神農氏之後帝明，得婺僊女而生涇陽王，是爲百粵始祖。王娶神龍女生貉龍君，君娶帝來女而生育有百男之祥，此其所以能肇我越之基也歟。考之『通鑑』外紀⑥，帝來帝宜之子。據此所載，涇陽王帝宜之弟，乃相爲婚姻，蓋世尚鴻荒，禮樂未著而然者歟。

【和訳2】

貉龍君

^{いみな}諱を崇纒と言ひ，涇陽王の息子である。

貉龍君は，帝來の娘である嫗姬を娶り，百人の男子をもうけ（俗説には百個の卵を産んだと言う），これが百越の祖先となった。ある日，貉龍君は嫗姬にこう告げた「私は龍の種族で，お前は仙人の種族だ。水と火が互いに制し合うように①，和合することはとても難しい」。なんとこうして彼女と別れてしまった。男子五十人を母に着いて山へ帰らせ，残りの五十子は父に着き従って南方に住み着いた（南海へ帰ったとも言ふ）。長男に雄王の位を授け，君位を継承させた。

史臣の吳士連はこのように述べた。天地開闢の際，ふたつの気が変化して生まれたのが，盤古氏であった②。ふたつの気が変化して，その後に形あるものが生まれるのは，すべて陰

陽二気のなせるわざである。『易』は言う「天地陰陽の気もつれ合いひとつになり、万物が見事につくり出される。男女がその精気を交合させて、万物が生み出される」、だから「夫婦がいて初めて親子の関係が成立し、親子がいて初めて君臣の関係が成立するのだ③」。そして聖人・賢人の出生に、必ず異常な事態が伴うのは、天命が下るからである。ツバメの卵を食べて契を生み④、巨人の足跡を履んで周が創建されたのは⑤、すべてこうした事実を記しているのである。神農氏の子孫に当たる帝明は、嫫仙の娘を娶って涇陽王をもうけ、これが百越の始祖となった。涇陽王は、神龍の女性を娶って貉龍君をもうけた。貉龍君は、帝来の娘を娶って男子百人の子宝に恵まれる吉祥を得た。こうして我が越国は創建されたのである。この事跡を『資治通鑑』の外紀によって考察してみると⑥、帝来は帝宜の息子に当たる。本書の記載によれば、涇陽王は帝宜の弟に当たることになる。なんと近親で婚姻を結んだわけであるが、思うにまだ太古未開の時代であり、文化が成熟しておらずこうなったのである。

【注2】

- ①水火相剋 欧陽脩「祭丁学士文（丁学士を祭るの文）」に「善悪之殊，如火与水，不能相容，其勢然爾（善悪の殊なるや，火と水の如く，相い容る能わず，其の勢は然るのみ）」とある。
- ②盤古氏 『芸文類聚』巻一に引用される徐整『三五曆紀』に「天地混沌如雞子。盤古生其中，萬八千歲。天地開闢，陽清為天，陰濁為地（天地混沌として雞子の如し。盤古は其の中に生まれ，万八千歳。天地開闢し，陽は清みて天と為り，陰は濁りて地と為る）」とある。
- ③易曰 前半は『易』繫辭下からの引用，後半は序卦伝からの引用である。
- ④吞玄鳥卵… 『史記』殷本紀に「三人行浴，見玄鳥墮其卵，簡狄取吞之，因孕生契（三人行きて浴し，玄鳥 其の卵を墮とすを見，簡狄取りて之を吞む，因りて孕み契を生む）」とある。また『詩經』商頌・玄鳥に「天命玄鳥，降而生商（天玄鳥に命じて，降りて商を生ましむ）」とある。
- ⑤履巨人跡… 『史記』周本紀に「姜原出野，見巨人跡，心忻然説，欲踐之。踐之而身動，如孕者（姜原野に出でて，巨人の跡を見，心忻然として説^{よろこ}び，之を踐まんと欲す。之を踐みて身動く，孕む者の如し）」とある。
- ⑥通鑑外紀 元・陳桎『通鑑統編』巻一に「宜生帝来，亦曰帝克，在位四十八年（宜帝来を生む，亦た帝克と曰う，在位四十八年）」とある。

【原文3】

雄王

貉龍君之子也（缺諱）。都峰州（今白鶴縣是也①）。

雄王之立也，建國號文郎國②（其國東夾南海，西抵巴蜀，北至洞庭湖，南接胡孫國③，即占城國，今廣南是也）。分國爲十五部，曰交趾，曰朱鳶，曰武寧，曰福祿，曰越裳，曰寧海，曰陽泉，

曰陸海，曰武定，曰懷驩，曰九真，曰平文，曰新興，曰九德④，以臣屬焉。其曰文郎，王所都也。置相曰貉侯，將曰貉將⑤（貉將後訛爲雄將）。王子曰官郎，王女曰媚娘。有司曰蒲正。世世以父傳子，曰父道。世主皆號雄王。時，山麓之民，見江河・濮水⑥，皆聚魚蝦，率相漁食，爲蛟蛇所傷，白於王。王曰「山蠻之種，與水族實殊。彼好同惡異，故有此病」。乃令人墨跡畫水怪於身。自是蛟龍見之，無咬傷之害，百粵文身之俗，蓋始此。

雄王六世，武寧部扶董鄉⑦，有富家翁生一男，三歲餘，飲食肥大，不能言笑。適國內有警，王令人求能卻敵者。其日，小兒忽能言，告其母邀天使來，曰「願得一劍一馬，君無憂也」。王賜之劍馬，小兒即躍馬揮劍而前，官軍從後，破賊於武寧山脚⑧。賊自倒戈相攻⑨，死者甚衆，餘黨羅拜，呼天將，即皆來降。小兒躍馬，騰空而去。王命開所居園宅，立廟時祀焉。後李太祖封爲冲天神王⑩（其神祠在扶董鄉建初寺側⑪）。

周成王時，我越始聘于周（未詳第幾世），稱越裳氏，獻白雉。周公曰「政令不施，君子不臣其人⑫」。命作指南車⑬，送還本國⑭。

【和訳3】

雄王

貉龍君の息子である（諱は分からない）。峰州に都を置いた（現在の白鶴県のことである①）。

雄王が君位を継承すると，建国して文郎国と名乗った②（その国土は，東方は南海をかかえ，西方は巴蜀に達し，北方は洞庭湖に至り，南方は胡孫国に接していた③。胡孫国とは，つまり占城国のことであり，現在の広南の地である）。国土を十五部に分割し，交趾・朱鳶・武寧・福祿・越裳・寧海・陽泉・陸海・武定・懷驩・九真・平文・新興・九徳は④，臣下として従属した。文郎と言うのは，王が都を置いた場所である。宰相がいてこれを貉侯と呼び，また將軍を貉將と呼んだ⑤（貉將は，後に雄將と誤記された）。王子を官郎と呼び，王女を媚娘と呼んだ。役人がいてこれを蒲正と呼んだ。代々父子相伝であったので，これを父道と言った。国君はみな雄王と名乗った。

当時，山麓の民は，大河や濮水を見て⑥，みな魚や蝦を捕まえ始めた。大部分が漁業をして食料としていたが，蛟や蛇に咬まれることがあり，雄王に事情を申し上げた。雄王が言うには「山に住む蛮族は，水族とは全く異なる存在だ。水族は同類を好んで異類を憎むから，このような災難が起るのだ」とのことだった。そこでなんと人々の身体に，水に住む怪物の姿を墨で画かせた。これ以降，蛟や龍はこれを見て，咬み付くなどの危害を加えなくなった。刺青を入れる百越の風俗は，思うにここに端を発しているのだろう。

雄王の第六世の時代，武寧部の扶董郷で⑦，裕福な家の父親のところに男の子が一人生まれた。三歳ほどで，よく食べよく飲み，みるみる大きくなったが，話したり笑ったりはできなかった。ちょうど国内で緊急の事態が起り，雄王は敵を撃退できる人物を探していた。

その日、男の子は突如うまく話せるようになり、母親に王様の遣わした使者を連れて来てくれと告げ「劍一振りと馬一匹をお与えください。心配には及びません」と言った。雄王が男の子に劍と馬を与えると、男の子はすぐさま馬を躍らせ劍をふるって前進し、官軍はその後ろに従った。そして賊軍を武寧山のふもとで撃破した⑧。賊軍は、こちらに寝返った者との間で殺し合いを始め⑨、戦死者をたいへん多く出した。残党は男の子を取り囲んで跪き、その子を天将と呼び、結局全員が投降した。男の子は馬を躍らせて、天空を駆けてどこかへ行ってしまった。雄王は男の子の住んでいた屋敷と庭園を開放すると、廟を建てて季節ごとに祭祀をおこなった。後世、李太祖は男の子に冲天神王の神位を授けた⑩（その神廟は扶董郷にある建初寺の脇にある⑪）。

周の成王の時代、我ら越人は始めて周を訪問した（雄王の第何世の時代であったのかは、はっきり分らない）。越裳氏と自称し、白い雉^{きじ}を献上した。すると周公は「政令をその土地で実施していないのなら、君子はその土地の人を臣下とは見なさない」と述べた⑫。命令を下して羅針盤を具えた車を製作し⑬、本国へ送還した⑭。

【注3】

①白鶴県 『大南一統志 嗣徳版』西南師範大学出版社/人民出版社・2015年の山西省・建置沿革に「白鶴県…本峰州地、古雄王所都也（白鶴県…本と峰州の地なり、古の雄王の都する所なり）」とある。

②文郎国 唐・杜佑『通典』卷一八四・古南越に「峰州〔今理嘉寧県〕、古文朗国〔有文朗水〕。亦陸梁地。秦属象郡（峰州〔今嘉寧県を理む〕、古の文朗国なり〔文朗水有り〕。亦た陸梁の地なり。秦象郡に属す）」とある。

③胡孫國 『嶺南摭怪列伝』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第一冊、学生書局・1992年）の「鴻龐氏伝」は狐孫國につくる。『嶺南摭怪外伝』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第一冊）の「鴻龐氏伝」は狐孫精國につくる。『梁書』扶南国に「其南界三千余里有頓遜国、在海崎上、地方千里、城去海十里。有五王、並羈属扶南。頓遜之東界通交州、其西界接天竺（其の南界の三千余里に頓遜国有り、海崎の上に在り、地方千里、城海を去ること十里。五王有り、並びに扶南に羈属す。頓遜の東界は交州に通じ、其の西界は天竺に接す）」とある。

④十五部 史略は、交趾・越裳氏・武寧・軍寧・嘉寧・寧海・陸海・湯泉・新昌・平文・文郎・九真・日南・懷驩・九徳とする。『嶺南摭怪列伝』鴻龐氏伝では、交趾・朱鳶・寧山・福祿・越裳・寧海・陽泉・桂陽・武寧・伊驩・九真・日南・真定・桂林・象郡を挙げる。越史は注で、阮鷹『輿地志』の阮天縦注に基づいて「山南〔今河内南定興安地是〕古交趾部、山西古朱載・福祿部、京北〔今北寧地是〕古武寧部、順化〔今広治之海陵至広南之奠盤地是〕古越裳部、安邦〔今広安地是〕古寧海部、海陽古陽泉部、諒山古陸海部、太原・高平古武定

部内外地，又安古懷驩部，清化古九真部，興化・宣光古新興部，余平文・九德二部闕。今考『晋志』，九德郡具置，今河靜省地是（山南〔今の河内・南定・興安の地 是れなり〕は古えの交趾部なり，山西は古えの朱載・福祿部なり，京北〔今の北寧の地 是れなり〕は古えの武寧部なり，順化〔今の広治の海陵より広南の奠盤に至るまでの地 是れなり〕は古えの越裳部，安邦〔今の広安の地 是れなり〕は古えの寧海部なり，海陽は古えの陽泉部なり，諒山は古えの陸海部なり，太原・高平は古えの武定部の内外の地なり，又安は古えの懷驩部なり，清化は古えの九真部なり，興化・宣光は古えの新興部なり，余の平文・九徳の二部 闕く。今『晋志』を考ふるに，九徳郡は具置く，今の河靜省の地 是れなり」といふ。陶維英『越南歴代疆域』商務印書館・1973年の19頁に詳しい説明がある。

⑤駱侯・駱將 『史記』南越列伝の索隱に「姚氏案，『広州記』云，交趾有駱田，仰潮水上下，人食其田，名為駱人。有駱王・駱侯。諸県自名為駱將，銅印・青綬，即今之令長也（姚氏案ずるに，『広州記』に云わく，交趾に駱田有り，潮水の上下を仰ぎて，人 其の田に食らう，名づけて駱人と為す。駱王・駱侯有り。諸県は自ら名づけて駱將と為し，銅印・青綬，即ち今の令長なり）」とある。

⑥濮水 『水経注』卷三十七に「葉榆水自邪龍県東南，逕秦臧県，南与濮水同注滇池。注于連然・双柏県也（葉榆水は邪龍県の東南より，秦臧県を逕て，南のかた濮水と共に滇池に注するに連然・双柏県に于いてす）」とある。『資治通鑑』武帝太康元年の胡三省注に「僕水・葉榆水・勞水・橋水皆出寧州界，入交・広界（僕水・葉榆水・勞水・橋水は皆 寧州の界に出で，交・広の界に入る）」とあり，濮水を僕水につくる。

⑦扶董郷 陳本・正和本は扶董郷につくる。孫本は扶董郷につくる。『嶺南摭怪列伝 卷三・続類』（『越南漢文小説叢刊』第二輯第一冊）の「冲天昭応神王伝」・『嶺南摭怪外伝』の「冲天昭応伝」は扶董郷につくる。越史の建嘉十年〔1220〕に注があり「扶董，郷名。今仙遊扶董社是（扶董は，郷名なり。今の仙遊の扶董社 是れなり）」とある。

⑧武寧山 黎崱『安南志略』卷一に「武寧山，俗伝下有趙越王墳（武寧山，俗伝に下に趙越王の墳有り）」とある。越史の注に「武寧，今武江県（武寧は，今の武江県なり）」とある。

⑨倒戈 『尚書』武成に「前徒倒戈，攻于後以北（前徒は戈を倒^{さかしま}にし，後に攻めて以^にて北ぐ）」とある。

⑩冲天神王 『安南志略』卷一に「冲天廟，在扶董郷。昔境内乱，忽見一人有威徳，民皆帰之，遂領衆平其乱，已而騰空去，号为冲天王，民乃立祠祀之（冲天廟，扶董郷に在り。昔境内乱れ，忽ち一人の威徳有るを見る，民は皆^{みな}之^{これ}に帰し，遂に衆を領して其の乱を平らげ，已にして空に騰^あがりて去り，号して冲天王と為し，民乃ち祠を立てて之を祀る）」とある。

⑪扶董郷 陳本・正和本は扶董郷につくる。孫本は扶董郷につくる。

⑫政令不施… 『後漢書』南蛮西南夷列伝に「公曰，徳不加焉，則君子不饗其質。政不施焉，則君子不臣其人。吾何以獲此賜也（公曰わく，徳加えざれば，則ち君子は其の質を饗^{にえ}けず。政^{まつりごと}施さざれば，則ち君子は其の人を臣とせず。吾れ何ぞ以て此の賜を獲らん）」とある。

⑬指南車 羅針盤を備えた車。晋・崔豹『古今注』輿服は、指南車の沿革を述べて、「使者迷其帰路，周公錫以文錦二匹駟車五乘，皆為司南之製，使越裳氏載之以南（使者 其の帰路に迷い，周公 ^{たま}錫うに文錦二匹・駟車五乘を以ってし，皆 ^{みな}司南の製為り，越裳氏をして之を載せて以って南せしむ）」と言う。

⑭周成王時… 『嶺南摭怪列伝』白雉伝に、同様の故事が見える。

【原文 4】

時屬季世①，王有女曰媚娘，美而艷。蜀王聞之，詣王求為婚。王欲從之，雄侯止之曰「彼欲圖我，以婚姻為由耳」。蜀王以是銜怨②。王欲求可配者，謂群臣曰「此女是僂種，才德兼備者，方可為姻」。時見二人外來拜見庭下，求為婚姻。王異而問之。對曰「一為山精，一為水精。皆在境內，聞明王有聖女，敢來請命」。王曰「我有一女，豈得兩賢乎」。乃約來日能具聘禮先來即與。兩賢應諾，拜謝而歸。明日，山精將珍寶・金銀・山禽・野獸等物來獻，王如約嫁之。山精迎回傘圓高峰居之③。水精亦將聘財後至，恨悔不及。遂興雲作雨，激水漲溢④，率水族追之。王與山精張鐵網，橫截慈廉上流以扞之⑤。水精從別江，自荳仁入廣威山脚⑥，緣岸上喝江口，出大江，入陀江⑦，擊傘圓，處處鑿為淵為潭，積水圍襲之。山精神化，呼得蠻人，編竹為籬禦水，以弩射之，鱗介諸種，中箭避走，終莫能犯也（俗傳，山精・水精是後世讎，每年大水，常相攻云）。

傘圓乃我越巔山，其靈應最為顯驗。媚娘既嫁山精，蜀王憤怒，囑其子孫，必滅文郎而併其國。至孫蜀泮，有勇略，乃攻取之。

史臣吳士連曰，雄王之世，建侯立屏⑧，分國為十五部。十五部之外，各有長佐，而庶子以其次分治焉。其五十子從母歸山，安知不如是耶。蓋母為君長，諸子各主一方也。以今蠻酋有男父道・女父道之稱⑨，觀之（今朝改為輔導是也⑩）理或然也。若山精・水精之事，亦甚怪誕，信『書』不如無『書』⑪，姑述其舊，以傳疑焉。

右鴻龐氏，自涇陽王壬戌受封，與帝宣同時，傳至雄王季世，當周赧王五十七年癸卯，終該二千六百二十二年。

【和訳 4】

末世①，雄王に媚娘という娘がおり，見目麗しい女性であった。蜀王はこの事を耳にして，雄王のところに結婚を申し入れた。雄王は応諾しようとしたけれども，雄侯が諫めて「蜀王は我らを支配下に入れようとしたらみ，婚姻をその口実にしようとしているだけです」と申し上げた。蜀王はこの事件によって怨みを抱くようになった②。雄王は娘にふさわしい連れ合いを探そうと思い，群臣に向かってこう述べた「わたしの娘は仙人の種族である。才能と品性を兼ね備えた人物でなければ，結婚させることはできない」。その時，ふたりの人物がよ

そからやって来て、庭下で雄王に拝謁し、結婚を申し入れた。雄王はふしぎに思い彼らに訊ねた。すると「一人は山の精で、もう一人は水の精です。二人ともこの国の領内に住んでいて、立派な王様のところに聖女がいると耳にし、畏れ多くもお伺いを立てにきました」と言う。雄王は「私には娘が一人いるだけだから、お二人を揃ってお迎えするわけにはいきません」とこたえた。そこで後日、結納の贈り物を携えて先にやって来た方に娘を与えると約束した。二人とも承諾し、お礼を述べて帰って行った。次の日、山の精は珍宝・金銀・山鳥・野獣などの贈り物を携えてくるとそれを献上した。雄王は約束通り娘を山の精に嫁がせた。山の精は娘を迎えて傘円山の高峰へ帰るとそこに住んだ③。水の精もまた結納の贈り物を携えて後から到着し、間に合わなかったことを悔しがった。そこで雲を巻き起こし雨を降らせ、激流が漲り溢れる中④、水に住む仲間を連れて山の精を追いかけた。雄王と山の精は、慈廉水の上流に⑤、鉄の網を張り渡して、水の精を遮った。水の精は別の川に沿って、菘仁から広威の山のふもとへと侵入した⑥。岸辺を歩いて川が分岐する場所で水を飲み、その水を大きい川の方へ吐き出した。水は陀江に流入して⑦、傘円山に激突した。あちこちが穿たれて淵へと変わった。水を集めて山の精を襲撃しようとしたのだった。山の精は変身して、蛮族を呼び寄せると、竹を編んで垣根を作って水を防ぎ、はじき弓で水の精たちを射た。魚介の諸種族は、矢に当たって逃走し、結局山の精を撃破することはできなかった（俗伝によると、山の精と水の精は、この後代々仇同士となった。毎年洪水があって、始終攻撃し合っている）。

傘円山とは、我が越国の頂点に位置する山であり、その靈験は最もあらたかである。媚娘は山の精に嫁いでしまい、蜀王は激怒し、必ず文郎国を滅ぼして併合するよう、その子孫に言いつけた。孫の蜀泮は勇略に優れ、文郎国を攻撃して支配下に置いた。

史臣の呉士連はこのように述べた。雄王の時代は、諸侯を配置して周囲の防備を固め⑧、国を十五部に分割した。この十五部の外側では妾腹の子供たちが、本妻の子供たちに次ぐ地位によって長佐の任に当たり、それぞれ分割統治していた。貉龍君の五十人の息子は、母につき従って山へ帰ったが、雄王と同じ政治体制を敷いたのではないか。思うに母親が君主となって、子供たちが各地を統治したのだ。現在も蛮族の酋長に男父道・女父道という言い方があり⑨、そこから推測すれば（本朝では改称して輔導と呼んでいる⑩）、この道理もたいがい通るはずだ。山の精・水の精の話は、まったくのでたらめである。『尚書』を妄信するくらいなら、『尚書』などない方がよい、という言葉がある⑪。ひとまず旧来の形を残し、疑問に思ったことを伝えることにする。

右は鴻臚氏の時代、涇陽王が壬戌に位を授かったのは、帝宜と同時代であった。そこから代々継承して雄王の末世、つまり周の赧王の五十七年癸卯【前258】に至った。合計二六二二年に及んだ。

【注4】

- ①時属季世 孫本はこの文章の前に、「後王」という項目を立てる。陳本・正和本にそのような記載はない。
- ②銜 陳本は啗につくった上で、銜に改めるべきだとする。正和本は啗につくる。孫本は何ら注を附すことなく銜につくる。陳本にしたがい、銜に改める。
- ③傘円山 『安南志略』巻一に「緞円山，山形如傘（緞円山，山形は傘の如し）」とある。『集韻』上声・緩韻は「緞轍傘奩」を同字であるとする。また『嶺南撫怪列伝』傘円山伝には「傘円山，在南越国都京城之西。其山屹立，円如傘形，故名焉（傘円山は，南越の国都京城の西に在り。其の山は屹立し，円きこと傘形の如し，故に名づく）」とある。越史の応天七年【1000】に注があり「傘円，山名。在山西不拔県。山勢聳拔如傘，故名（傘円は，山名なり。山西の不拔県に在り。山勢聳え拔んでて傘の如し，故に名づく）」とある。
- ④遂興雲… 陳本は「激遂興雲作雨，水漲溢」につくる。正和本・孫本は「遂興雲作雨，激水漲溢」につくる。正和本にしたがう。
- ⑤慈廉 『安南志略』巻一に「慈廉水，『九域志』慈廉水在交趾。昔李仁祖居水辺，兄弟十人並慈孝，因得名焉（慈廉水，『九域志』に慈廉水は交趾に在り。昔李仁祖水辺に居り，兄弟十人並びに慈孝，因りて名を得）」とある。越史の光泰十年【1397】に注があり「慈廉，唐所置県名。陳為州，黎復為県，今因之，属河内省（慈廉は，唐の置く所の県名なり。陳は州と為し，黎は復た県と為し，今之に因り，河内省に属す）」とある。
- ⑥莅仁・広威 莅仁については，越史の天符睿武六年【1125】に注があり「利仁，州名。今河内里仁府是。按河内冊，属明以前曰利仁州，黎光順改莅仁府，明命年間改里仁。則莅仁至黎始改（利仁は，州名なり。今の河内里仁府是れなり。河内冊を按ずるに，属明以前は利仁州と曰い，黎の光順に莅仁府に改め，明命年間に里仁に改む。則ち莅仁は黎に至りて始めて改めるなり）」とある。広威については，越史の建嘉八年【1218】に注があり「広威，古交趾郡地。李為広威州，陳為鎮，属明為州，黎為府。今山西広威府是（広威は，古の交趾郡の地なり。李は広威州と為し，陳は鎮と為し，属明は州と為し，黎は府と為す。今の山西の広威府是れなり）」とある。
- ⑦陀江 『安南志略』巻一に「三帯江，帰化江水自雲南，宣光江水自特磨道，沱江水自撞龍，因名焉（三帯江，帰化江の水は雲南よりし，宣光江の水は特磨道よりし，沱江の水は撞龍よりす，因りて名づく）」とある。
- ⑧建侯立屏 宋・夏僎『尚書詳解』は，禹貢の「五百里侯服（五百里は侯服）」を解して，「此蓋甸服外之五百里，天子將以建侯立屏，以藩衛王室，故謂之侯服也（此れ蓋し甸服の外之五百里は，天子將に侯を建て屏を立て，以って王室を藩衛するを以って，故に之を侯服と謂うなり）」と云う。
- ⑨女父道 (4) 【3】に「世世以父伝子，曰父道（世世父の子に伝えるを以ってし，父道と曰う）」

とあるので、男父道とは父系制度、女父道とは母系制度を指すと考えられる。

⑩輔導 陳本は注において、正和本ではこの部分が欠葉となっており、補鈔されていることを指摘し、輔道につくった上で、他本によって輔導に改める。正和本は、陳本が指摘する通り、この部分が欠葉となっている。孫本は、何ら注を附すことなく輔導とする。陳本にしたがい輔導とする。

⑪信書不如… 『孟子』尽心下に「孟子曰、尽信『書』、則不如無『書』（孟子曰わく、尽く『書』を信ぜば、則ち『書』無きに如かず）」とある。

【原文5】

蜀紀

安陽王 在位五十年

姓蜀、諱泮。巴蜀人也①。都封溪②（今古螺城是也）。

甲辰、元年（周赧王五十八年）王既併文郎國、改國號曰甌貉國③。初、王屢興兵攻雄王。雄王兵強將勇、王屢敗。雄王謂王曰「我有神力、蜀不畏乎」。遂廢武備而不修、需酒食以爲樂。蜀軍逼近、猶沈醉未醒、乃吐血墮井、其衆倒戈降蜀。王於是築城于越裳、廣千丈、盤旋如螺形、故號螺城。又名思龍城（唐人呼曰崑崙城、謂其城最高也④）。其城築畢旋崩、王患之、乃齋戒禱于天地山川神祇、再興功築之。

丙午、三年（東周君元年）春三月、忽有神人到城門、指城笑曰「工築何時成乎」。王接入殿上問之、答曰「待江使來」。即辭去。後日早、王出城門、果見金龜從東浮江來、稱江使、能說人言、談未來事。王甚喜、以金盤盛之、置盤殿上、問城崩之由。金龜曰「此本土山川精氣、前王子附之、爲國報仇、隱於七耀山。山中有鬼、是前代伶人死、葬於此、化爲鬼。山傍有館、館主翁曰悟空者、有一女并白雞一隻、是精之餘氣⑤。凡人往來至此、夜宿必死、鬼害之也。所以能嘯聚成群、墮壞其城。若殺白雞、除此精氣、則其城自爾完固矣」。王將金龜就館、假爲宿泊人。館主翁曰「郎君即貴人也、願速行、勿留取禍」。王笑曰「死生有命、鬼魅何能爲」。乃留宿焉。夜聞鬼精從外來、呼開門。金龜叱之、鬼不能入。鷄鳴時、衆鬼走散。金龜請王追躡之、至七耀山、精氣收藏殆盡。王還館。明旦館主翁以爲王必死、呼人就館、欲行收葬。見王欣笑語、趨拜曰「郎君安得若此、必聖人也」。王乞取白雞、殺而祭之。雞殺、女亦死。即令人掘山、得古樂器及其骸骨、燒碎爲灰、散之江河、妖氣遂絕。自此築城、不過半月而成。金龜辭歸、王感謝請曰「荷君之恩、其城已固。如有外侮、何以禦之」。金龜乃脫其爪付王、曰「國家安危、自有天數、人亦防之。倘見賊來、用此靈爪爲弩機、向賊發箭、無憂也」。王命臣臯魯（一云臯通⑥）、造機弩、以爪爲機、名曰靈光金爪神弩（唐高王平南詔、兵還過武寧州、夜夢異人稱臯魯、曰「昔輔安陽王有卻敵大功、被貉侯譖去之。沒後、天帝憫其無過、命賜一條江山、管領都統將軍征討寇賊及農時稼穡、皆主之。今既從明公討平逆虜、復至本部、不告謝、非禮也」。高王寤、以

語僚屬，有詩曰「美矣交州地，悠悠萬載來。古賢能得見，終不負靈臺⑦）」⑧。

【和訳5】

蜀の時代

安陽王 在位は五十年間。

姓は蜀，諱は泮^{はん}と言った。巴蜀の人物であった①。封溪に首都を置いた②（現在の古螺城である）。

【前257】甲辰，安陽王の元年（周の赧王の五十八年）王は文郎国を併合し，国号を甌貉国と改めた③。さかのぼること，安陽王は幾度も挙兵して雄王を攻撃した。雄王の兵士は強く將軍は勇敢で，安陽王は幾度も敗退した。雄王は安陽王に向かって「私には不思議な力があるのだ，蜀など畏れるに足らぬわ」と言うのであった。そして武装を解いて軍備を怠るようになり，酒とごちそうを求めて歡樂にふけた。蜀軍が接近しても，なお泥酔して正氣に戻らず，なんと吐血して井戸に墜ち込んで薨去してしまったのだ。雄王の一味は寝返って蜀に降伏した。安陽王はそこで越裳の地で築城を開始した。大きさは千丈もあり，巻き貝のように螺旋を描いているので，螺城と言った。別名を思龍城とも言った（中国人が崑崙城と呼ぶのは，その城がこの上なく高いからである④）。城は築き終わるとすぐに崩壊してしまった。安陽王は思い悩んで，齋戒して天地山川の神靈に祈りを捧げてから，工事を再開し建築に着手した。

【前255】丙午，安陽王の三年（東周君の元年）春三月，神人が螺城の門前まで突如やって来た。そして螺城を指さして笑いながら「いつになったら落成することやら」と言った。安陽王は，宮殿へ迎え入れて，この神人に訊ねた。神人は「川の使いがやって来るのを待て」と答えると，すぐに立ち去った。後日，朝早く安陽王が城門を出てみると，果して金色の亀が東の方角から川に浮かんでやって来るのが見えた。自ら川の使いだと名乗り，ひとの言葉を話すことができ，未来の出来事を語った。安陽王はとても喜んで，金色のたらいに亀を入れると，そのたらいを宮殿に置いて，螺城が崩れてしまう理由について訊ねた。

金色の亀はこのように語り出した「この土地の山川の邪気を見ると，雄王の王子がこの土地を根城にして，国家のために復讐しようと，七耀山に潜伏したことがあったようだ。七耀山にはいま幽霊がおり，これは前代の樂人が死んでこの土地に葬られ，化けて幽霊になったものだ。山裾に館^{やかた}がある。館の主人のじいさんは，名を悟空と言って，娘が一人いるのと一匹の白いニワトリを飼っている。これが邪気の残余なのである⑤。旅人がここにやって来て，夜に宿をとると必ず死ぬことになる。幽霊が旅人を殺めるからだ。この幽霊が仲間を呼び集めて群れをなすがために，螺城は崩壊するのだ。もしも白いニワトリを殺して，この邪気を取り除けば，螺城はそれ以降強固になるだろう」。

安陽王は，金色の亀を携えて館^{やかた}へ赴き，投宿者のふりをした。館主のじいさんが言うには

「あなた様は高貴なお方でしょう。どうぞ早くお引き取り下さい。こんな所に居て、ろくでもないことに巻き込まれめさるな」とのことだった。安陽王は笑って応答した「死ぬも生きるも運命だ。ばけものの何するものぞ」。なんと館に留まり宿泊することにしたのだった。夜分、幽霊がやって来て、門を開けろと言うのが聞こえた。金色の亀が吐りつけるので、幽霊は中へ入ることができなかった。ニワトリが鳴いて夜が明けると、幽霊たちはてんでんばらばらに逃げ去った。金色の亀は、尾行するよう安陽王に求めた。七耀山までやって来ると、邪気は収まりほとんど消えてしまった。安陽王は館へ帰った。翌日の朝、館主のじいさんは、王様が死んだものだと思って、人を呼んで館まで来させ、王様を埋葬しようとした。ところがじいさんは、王様が笑いながら話しているのを目の当たりにしたので、走り寄ってお辞儀をすると「あなた様はどうしてご無事なのですか。きっと聖人に違いない」と言った。安陽王は、じいさんから白いニワトリを手に入れ、これを殺して祭った。ニワトリが殺されると、じいさんの娘もまた死んだ。そこで七耀山を掘らせてみると、古びた楽器と楽人の骸骨が出て来た。これを焼き砕いて灰にし、大きな川に撒いた。すると妖気は遂に絶えたのだった。築城はそれから半月も経たずに完了してしまった。金色の亀があいさつをして帰ろうとすると、安陽王は亀に感謝し、さらにも願いをして言った「あなたのお蔭で、螺城も堅牢になりました。もしも侵略に遭ったら、どう防げばいいでしょうか。金色の亀はなんと自らの爪を外すと王様に託して「国家の安泰と危機は、運命によるものだが、人でも予防することくらいはできる。もしも賊軍が来襲することがあれば、この霊験あらたかな爪を大弓の引き金にして、賊軍に向かって矢を発射しなさい。そうすれば何も心配はいらない」と言った。安陽王は臣下の臯魯（一説には臯通だと言う⑥）に命じて、機械じかけの大弓を製作させ、引き金に爪を使用し、れいこうきんせうしん ど 霊光金爪神弩と名付けた（唐の高駢が南詔を平定し、軍隊を帰還させる途中、武寧州に立ち寄った。夜中に高駢は、臯魯と名乗る異人を夢に見た。臯魯が語るには「その昔、安陽王を補佐して敵兵を撃退する大功を立てたが、貉侯から中傷を受けて、その場を去ることになった。死後、天帝は私に何ら過失がないことを不憚に思い、命令を下して一帯の土地を賜い、あなた都統將軍が逆賊を征伐することも、農繁期の作物なども私に監督させ、これらすべてを私が主管している。いま貴公は逆賊を掃蕩して、私の管轄する土地に来たのに、感謝の言葉もないとは無礼である」とのことだった。高駢は目が覚めると、この話を部下に語って聴かせた。詩に言う「麗しの交州の地、万年の歴史を閲す。古代の賢人に出会い、わが意に背かず⑦」⑧）。

【注5】

- ①安陽王… 陳本は「安陽王 姓蜀、諱泮。巴蜀人也。在位五十年」につくる。正和本・孫本は「安陽王 在位五十年。姓蜀、諱泮。巴蜀人也」につくる。正和本にしたがう。
- ②都封溪 『史記』南越列伝の索隠に「姚氏案、『広州記』云、…後蜀王子将兵討貉侯、自称

為安陽王，治封溪県。後南越王尉他攻破安陽王（姚氏案ずるに、『広州記』に云わく、…後に蜀の王子兵を將いて駱侯を討ち，自ら称して安陽王と為し，封溪県を治む。後に南越王の尉他攻めて安陽王を破る）」とある。

③甌貉国 『史記』南越列伝に「其西甌貉裸国，亦称王（其の西の甌貉裸国，亦た王を称す）」とあり，貉を駱に作る。

④崑崙城 『輿地紀勝』卷一〇七・広南西路・昭州に「崑崙城，在平楽県東南四十里（崑崙城，平楽県の東南四十里に在り）」とある。

⑤精之餘氣 『嶺南摭怪列伝』金亀伝では、「精之餘氣」を「鬼精之餘氣」につくる。

⑥臯通 『水経注』卷三十七・葉榆川に、『交州外域記』を引用して「安陽王有神人名臯通，下輔佐，為安陽王治神弩一張，一發殺三百人（安陽王に神人の臯通と名のる有り，下りて輔佐し，安陽王の為に神弩一張を治め，一発にして三百人を殺す）」とある。

⑦靈台 『莊子』庚桑楚に「不可内於靈台【郭象注】靈台者，心也（靈台に内るべからず【郭象注】靈台は，心なり）」とある。

⑧唐高王… 『嶺南摭怪外伝』高將軍伝に同様の故事が見える。

【原文6】

壬子，九年（東周君七年。秦・楚・燕・趙・魏・韓・齊凡七國）是歲周亡。

庚辰，三十七年（秦始皇呂政二十六年）秦併六國，稱皇帝。時，我交趾慈廉人李翁仲，身長二丈三尺。少時往鄉邑供力役，為長官所笞。遂入仕秦，至司隸校尉。始皇得天下，使將兵守臨洮，聲振匈奴，及老歸田里卒。始皇以為異，鑄銅為像，置咸陽司馬門，腹中容數十人，潛搖動之，匈奴以為生校尉，不敢犯（唐趙昌為交州都護，常夜夢與翁仲講『春秋左氏傳』。因訪其故宅，在焉，立祠致祭，迨高王破南詔，常顯應助順①。高王重修祠宇②，彫木立像，號李校尉。其神祠在慈廉縣瑞香社）③。

丁亥，四十四年（秦始皇三十三年）秦發諸道逋亡人・贅婿・賈人為兵④，使校尉屠睢將樓船之士，使史祿鑿渠運糧⑤，深入嶺南，略取陸梁地，置桂林（今廣西明貴縣是也）・南海（即今廣東）・象郡（即安南），以任囂為南海尉，趙佗為龍川令⑥（龍川，南海屬縣），領謫徒兵五十萬人戍五嶺⑦。囂・佗因謀侵我（贅婿，男無財聘，以身自質於妻家，曰贅婿。如人身之贅贅，是餘剩之物。陸梁地，嶺南人多處山陸間，其性強梁，故曰陸梁）。

【和訳6】

【前249】壬子，安陽王の九年（東周君の七年。秦・楚・燕・趙・魏・韓・齊の七ヶ国）この年，周が滅亡した。

【前221】庚辰，安陽王の三十七年（秦の始皇帝こと呂政の二十六年）秦が六ヶ国を併合し，皇

帝を名乗った。当時、我が交趾慈廉の人物である李翁仲は、身のたけが二丈三尺もあった。若い時、大きな町に出て労役にあてがわれ、長官に鞭打たれたりした。とうとう秦国に仕えることになり、司隸校尉に昇進するまでになった。始皇帝は天下を手中にし、将兵に臨洮を守らせ、李翁仲の名声は匈奴の間に轟いた。年老いと故郷に帰りそこで死んだ。始皇帝は、李翁仲を特異に思い、銅像を鑄造して、咸陽の司馬門に設置した。腹の中に数十人が入り、気取られないように銅像を揺り動かすと、匈奴は生きた司隸校尉だと思い、国境を侵犯しようとしなくなった（唐の趙昌が交州都護だった時、毎晩李翁仲と『春秋左氏伝』について研究する夢を見た。そこで李翁仲の故宅を訪れてみると、まだそこにあった。祠堂を建てて祭祀をおこない、高駢が南詔を撃破した頃まで、ずっと靈驗あらたかに天道に従う者を助け続けた①。高駢は祠堂を改修し②、木彫りの像を立てて、李校尉と呼んだ。その祠堂は慈廉県の瑞香社にある）③。

【前214】丁亥、安陽王の四十四年（秦の始皇帝の三十三年）秦は各道の逃亡人・贅婿・商人から徴兵し④、校尉の屠睢に水軍を引率させ、史禄に運河を掘り食料を運ばせ⑤、嶺南の奥地まで侵入すると、陸梁の地を奪取した。桂林（現在の広西明貴県のことである）・南海（現在の広東である）・象郡（安南のことである）を置き、任囂を南海尉に任命し、趙佗を龍川令（龍川は、南海に下属する県である）に任命し⑥、流罪の歩兵五十万人を統括して五嶺の辺境防備に当たさせた⑦。こうして任囂・趙佗は我らを侵略しようと画策するようになった（贅婿、結納金のない男性が、妻の家に自らを人質に預けるのを、贅婿と言う。体にできた疣・贅のように、余計なものと言うのである。陸梁の地、嶺南の人々は多くが山岳部に住んでおり、性格が強暴なので、陸梁と言う）。

【注6】

①助順 『易』繫辭上に「天之所助者順也、人之所助者信也（天の助くる所の者は順なり、人の助くる所の者は信なり）」とある。

②祠宇 陳本は祠字につくる。正和本・孫本は祠宇につくる。正和本にしたがう。

③李翁仲 『嶺南摭怪列伝』李翁仲伝に、同様の故事が見える。また『史記』秦始皇本紀に「収天下兵、聚之咸陽、銷以為鍾鐻・金人十二、重各千石、置廷宮中【索隱】按二十六年、有長人見于臨洮、故銷兵器、鑄而象之。謝承『後漢書』“銅人、翁仲、翁仲其名也”（天下の兵を収め、之を咸陽に聚め、銷して以って鍾鐻・金人十二と為し、重さ各おの千石、廷宮の中に置く【索隱】按ずるに二十六年、長人の臨洮に見る有り、故に兵器を銷して、鑄て之を象る。謝承『後漢書』に“銅人、翁仲、翁仲は其の名なり”と）」とある。

④秦發諸道… 『史記』秦始皇本紀に「三十三年、發諸嘗逋亡人・贅婿・賈人略取陸梁地、為桂林・象郡・南海、以適遣戍【正義】嶺南人多處山陸、其性強梁、故曰陸梁（三十三年、諸もろ嘗ての逋亡人・贅婿・賈人を發して陸梁の地を略取し、桂林・象郡・南海と為し、適を以って遣り戍らしむ【正義】嶺南の人多く山陸に處り、其の性は強梁、故に陸梁と曰う）」とある。

⑤使校尉… 『史記』平津侯列伝に「又使尉佗・屠睢將樓船之士南攻百越，使監祿鑿渠運糧，深入越【集解】韋昭曰，監御史名祿也（又た尉佗・屠睢をして樓船の士を將い南のかた百越を攻めしめ，監祿をして渠を鑿ち糧を運び，深く越に入らしむ【集解】韋昭曰わく，監御史名は祿なり）」とある。

⑥以任囂… 『史記』南越列伝に「佗，秦時用為南海龍川令。至二世時，南海尉任囂，病且死（佗，秦の時用いられて南海龍川の令と為る。二世の時に至り，南海尉の任囂，病みて且に死せんとす）」とある。

⑦領謫徒兵… 『資治通鑑』始皇帝三十三年に「以謫徙民五十万人戍五嶺，与越雜処（謫を以つて民五十万人を徙し五嶺を戍り，越と雜処す）」とある。

【原文7】

辛卯，四十八年（秦始皇三十七年①）冬十月，秦始皇崩于沙丘②。任囂・趙佗帥師來侵。佗駐軍北江僂遊山與王戰③，王以靈弩射之，佗敗走。時，囂將舟師在小江（即都護府，後訛為東湖，今東湖津），犯土神，染病歸，謂佗曰「秦亡矣，用計攻泮，可以立國」。佗知王有神弩不可敵，退守武寧山，通使講和。王喜，乃分平江④（今東岸・天德江是也⑤），以北佗治之，以南王治之。佗遣子仲始入侍宿衛，求婚王女媚珠，許之。仲始誘媚珠，竊觀靈弩，潛毀其機，易之。託以北歸省親，謂媚珠曰「夫婦恩情不可相忘，如兩國失和，南北隔別，我來到此，如何得相見」。媚珠曰「妾有鵝毛錦褥，常附於身，到處拔毛置岐路，以示之」。仲始歸以告佗。

癸巳，五十年（秦二世胡亥二年）任囂病且死，謂佗曰「聞陳勝等作亂，民心未知所附。此土僻遠，吾恐群盜侵犯至此，欲與絕道（秦所開越道也）⑥，自備，待諸侯變」。會病甚，曰「番禺（漢曰南城）負山阻水，東西各數千里，頗有秦人相輔，亦足建國興王，為一方之主也。郡中長吏無足與謀者，故特召公告之」。因以佗自代。囂死，佗即移檄告橫浦・陽山・湟谿關，曰「盜兵且至，急絕道聚兵自守」。檄至，州郡皆應之。於是盡殺秦所置長吏，以其親黨代為守⑦。佗發兵攻王，王不知弩機已失，圍棋笑曰「佗不畏吾神弩耶」。佗軍逼近，王舉弩已折矣。尋走敗，坐媚珠於馬上，與王南奔。仲始認鵝毛追之。王至海濱，途窮無舟楫，連呼金龜速來救我。金龜湧出水上，叱曰「乘馬後者是賊也，蓋殺之」。王拔劍欲斬媚珠。媚珠祝曰「忠信一節為人所詐，願化為珠玉，雪此讎恥」。王竟斬之。血流水上，蛤蚌含入心，化為明珠。王持七寸文犀入海去（今辟水犀也⑧。世傳廣州高舍社夜山是其處⑨）。仲始追及之，見媚珠已死，慟哭抱其尸，歸葬螺城，化為玉石。仲始懷惜媚珠，還於粧浴處，悲想不自勝，竟投身井底死。後人得東海明珠，以井水洗之，色愈光瑩。

【和訳7】

【前210】辛卯，安陽王の四十八年（秦の始皇帝の三十七年①）冬十月，秦の始皇帝が沙丘で崩

御した②。任囂・趙佗が、軍隊を統率して侵略にきた。趙佗は軍隊を北江の僂遊山に駐屯させ③、安陽王と戦った。安陽王が神弩で趙佗の軍隊を射ると、趙佗は敗走した。当時、任囂は水軍を引率して小江に駐留していた（都護府のことである。後に東湖と誤記された。現在の東湖津を指す）。任囂は土地神に無礼をおこない、病気にかかって逃げ帰ると、趙佗に言った「秦は滅亡した。策を講じて蜀泮を攻撃し、建国すべきだ」。趙佗は、安陽王には神弩があり敵わ^{かな}ないことを知り、退却して武寧山で守備を固め、使者をやりとりして講和を結ぼうとした。安陽王は喜び、あろうことか平江④（現在の東岸・天徳江のことである⑤）で国境を分かち、北側を趙佗が統治し、南側を安陽王が統治することになった。趙佗は息子の仲始を差し向け、安陽王の護衛として侍らせると、王女の媚珠に求婚させた。結婚は認められた。仲始は媚珠を誘惑して、こっそり靈弩を見せてもらった。見つからないようにその武器を壊すと、別のものと取り換えてしまった。親の面倒を見ることを口実に北へ帰ろうとし、媚珠に言うには「私たち夫婦の絆は途切れない。もし両国が不和になり、南北が断絶することになったら、私はこちらへやって来るつもりだ。しかし落ち合うにはどうすればいいだろう」。媚珠は答える「わたしにはガチョウの羽毛でこしらえた敷物があって、肌身離さず持ち歩いております。あちこちで羽毛を抜いて分かれ道に置いておきますから、それであなたへの道しるべにしましょう」。仲始は帰還すると、このことを趙佗に話した。

【前208】癸巳、安陽王の五十年（秦の二世皇帝である胡亥の二年）任囂は病気にかかり危篤に陥ると、趙佗に言った「陳勝たちが反乱を起こし、民心が誰に帰すのかまだ分からないような状況だそうだ。この土地は僻遠にあるが、群盗がこの土地にまで侵犯してくるのではないかと、私は心配だ。一緒に道路を切断して（秦が切り開いた越の地へ向かう道である）⑥、守備を固め、諸侯の変化を見守ろうではないか」。任囂はいまわの際に趙佗へこう言い残した「番禺（漢代には南城と言った）は山を背にし水に隔てられ、東へも数千里、西へも数千里の土地がある。秦人で補佐してくれる人材もかなりおり、国を作り王業を興し、君主として天下の一角を占めることができるはずだ。この郡の上級官吏の中には、策謀を共に巡らせうる人物がいないので、わざわざあなたを呼んでこの事を話したのだ」。こうして趙佗を自分の代理に任命した。任囂は死んだ。趙佗はさっそく横浦・陽山・湟谿関に檄を飛ばした。その文面は「賊軍がやって来ようとしている。早急に道路を切断して、兵士を召集し防備につけ」というものだった。檄文が到達すると、各地方はみな趙佗に呼応した。そこで秦が任命した上級官吏をすべて殺してしまい、自分の一味を代わりに長官とした⑦。

趙佗は拳兵して安陽王を攻撃した。安陽王は、神弩がすでに失われているとも知らず、碁盤を囲んで笑って言った「趙佗はわたしの神弩が怖ろしくないとでも言うのか」。趙佗の軍勢が接近して、王が神弩をかまえると、もうへし折れていた。すぐに逃げ出して戦いに敗れた。安陽王は、媚珠を馬に乗せて一緒に南へ急いだ。仲始は、ガチョウの羽毛をたよりに彼らを

追いかけた。安陽王は海辺までやって来ると、行き詰まり舟もなかった。「金色の亀よ、早く助けに来てくれ」と幾度も叫んだ。金色の亀は水面に浮き出てくると、叱って言った「尻馬に乗っている奴は裏切り者だ、どうして殺さない」。安陽王は、剣を抜いて媚珠を斬ろうとした。媚珠は祈って言った「忠信一徹のはずが騙されました。真珠と化して、この恨みと恥辱を晴らしとうございます」。王はとうとう彼女を斬り殺した。その血は水の中へ流れていき、どぶがいに取り込まれその芯へ到ると、真珠と化した。安陽王は、紋様を帯びた七寸もある犀角さいかくを携えて海へ入って行った（現在の辟水犀である⑧。世に伝えるに濱州の高舎社の夜山がその場所であると言う⑨）。仲始は安陽王たちを追いかけて、媚珠が死んでしまったことを発見し、慟哭してその死体を抱きしめた。螺城なきがらに帰り亡骸を葬ると、死体は玉石と化した。仲始は媚珠が恋しく口惜しく、媚珠が身支度をしていた部屋へ戻ると、悲しい気持ちに耐えきれず、とうとう井戸に身を投げて死んでしまった。後世の人が、東海の実珠を手に入れて、この井戸水で洗ったところ、真珠はますます光り輝いたと言う。

【注7】

- ①三十七年 陳本・正和本は三十七年につくる。孫本は十七年に誤る。
- ②秦始皇… 『史記』秦始皇本紀に「七月丙寅、始皇崩於沙丘平台（七月丙寅、始皇沙丘の平台に崩ず）」とある。
- ③僊遊山 『安南志略』卷一に「仙遊山、有盤石隱然有杵紋、昔伝仙弈於此、後樵女野合其上、石覆且裂（仙遊山、盤石の隱然として杵紋有る有り、昔伝えるに仙此に弈し、後に樵女其の上に野合し、石覆くつがえ且つ裂く）」とある。『殊域周咨録』卷六・安南に「仙遊山、在北江府、一名爛柯山（仙遊山は、北江府に在り、一名爛柯山）」とある。
- ④平江 『嶺南摭怪列伝』金亀伝は小江につくる。
- ⑤東岸… 越史の注に「平江、即天德江、乃瀘江東岸分流下通平灘江。又名東岸江（平江は、即ち天德江なり、乃ち瀘江の東岸分流して下りて平灘江に通ず。又た東岸江と名づく）」とある。『越嶠書』卷一に「天德江、一名廷蘊、又名東岸（天德江、一名廷蘊、又の名を東岸）」とある。
- ⑥欲与絶道… 『史記』南越列伝に「吾欲興兵絶新道、自備、待諸侯变【索隱】案、蘇林云、秦所通越道（吾れ兵を興こして新道を絶ちて、自ら備え、諸侯の変を待たんと欲す【索隱】案ずるに、蘇林云わく、秦の通ずる所の越道なり）」とある。
- ⑦任囂病… 以上の部分は、『史記』南越列伝の内容をなぞる。
- ⑧辟水犀 『安南志略』卷十四・物産に「辟水犀、旧伝、安陽王有七寸文犀、戦敗投犀于海、水開、王入水免禍（辟水犀、旧伝に、安陽王に七寸の文犀有り、戦敗して犀を海に投ずるに、水開き、王水に入りて禍いを免る）」とある。犀角が水を割る説話は、『抱朴子』登涉に「得真通天犀角三寸以上、刻以為魚、而銜之以入水、水常為人開方三尺（真の通天犀角の三寸以上を得て、刻み

て以って魚と為し、之を銜みて以って水に入れば、水は常に人の為に開くこと方三尺）」とある。また唐・李朝威「柳毅伝」にも「洞庭君因出碧玉箱、貯以開水犀（洞庭君因りて碧玉の箱を出だし、貯えるに開水犀を以ってす）」とある。

⑨濱州…『皇越地輿誌』卷二・父安鎮濱州府東城県に「暮夜山、東城県、歴福香藹香蘭三社、有安陽王廟。…俗伝、王失亀爪神弩、奔南海、鵝毛錦褥表道、即此（暮夜山、東城県、歴福・香藹・香蘭の三社、安陽王廟有り。…俗伝に、王亀爪の神弩を失い、南海に奔り、鵝毛の錦褥道を表す、即ち此なり）」とある。

【原文 8】

史臣吳士連曰、金龜之説信乎。有幸降神①、石能言②、容或有之。蓋神依人而行、託物以言也。國之將興、神明降之、以監其德。將亡、神亦降之、以觀其惡。故有待神以興、亦有以亡。安陽王興功築城之役、有不節民力、故神託金龜告之。非怨讎動乎民、而能然耶、猶似之也。及其憂後患而要請於神、則私意起矣。私意一萌、則天理隨滅。神安得不羞以禍耶。其脫靈爪付之、謂足以卻敵、其禍之萌乎。如神有賜號土田之命、而號隨以亡也③。厥後果然、何莫非依人而行也。如無要請之言、但循理而行、安知國祚之不長久乎。至於媚珠鵝毛表道之事、未必有也。如或有之、僅一見焉可也。後趙越王女、再模倣言之、何耶。蓋編史者、以蜀・趙亡國之由、皆出於女媧。故因一事而兩言之歟。然則鬼能隳城亦信乎。曰伯有爲厲之類也、彼立其後、得所歸而止④。此除其妖、無所附而止。至於史記安陽王敗亡、因神弩易機、趙越王敗亡、因兜鍪失爪、乃假辭以神其物爾。若夫固國禦戎、自有其道、得道者多助而興、失道者寡助而亡⑤、非爲此也。

右安陽王、起甲辰、終癸巳、凡五十年。

「大越史記外紀全書」卷之一 終⑥

【和訳 8】

史臣の吳士連はこのように述べた。金色の亀の話は本当か。虢国の莘の地に神が降臨し①、石が言葉を話すことも②、あるいはあるのだろう。思うに神は、人の徳に応じて福を下し、物を依代よりしろにしてお告げを下すのである。国が勃興しようとする時、神靈は降臨して、その徳行をご覧になる。国が滅亡しようとする時にも、やはり神靈は降臨して、その悪行を見ている。だから神を迎えて勃興することもあれば、滅亡することもある。安陽王は築城の労役を事業としておこない、人民を使役して遠慮がなかった。そこで神は、金色の亀を依代よりしろにして安陽王にお告げを下したのだ。怨嗟が人民にきざさなければ、このようなことは起こらない。やはり先例と同じである。将来の災いを心配して神頼みをしたところで、利己心というものが起こった。ひとたび利己心がきざせば、天理から見放されてしまう。神は厄災によって恥

辱を与えざるをえない。靈驗あらたかな爪を外して安陽王に与え、これで敵を撃退できると告げたのは、厄災の前兆ではなかったか。それはまるで虢国に田地を賜わると神からお告げがありながら、間もなく滅びたのに似ている③。その後、果たして同じ羽目に陥ったではないか。何としても人の徳に依じて福は下されるのだ。神頼みをせず、ただ天理に従って実行していれば、国運はこんなに短かかっただろうか。媚珠が鵝毛を道標にしたことは、必ずしも事実とは言えない。たとえ事実だったとしても、一度記せば十分である。後に趙越王の娘のところで、再び模倣して同じ出来事が語られるのは、なぜか。思うに史書を編纂した人物は、安陽王・趙越王が国を滅ぼした原因が、どちらも娘婿にあるので、同じ出来事を二度も語ったのだろうか。そして幽霊が螺城を崩壊させた話は、また本当なのだろうか。思うに伯有が悪霊となった事例があり、そちらでは後継ぎを立てると、落ち着く先ができて祟りは止んだ④。こちらの事例では、妖怪を退治すると、依り付く先がなくなって祟りは止んだ。安陽王の失敗と滅亡は、神弩をすり換えられたせいであり、趙越王の失敗と滅亡は、兜に着けた龍の爪を失ったせいだ、と史書が記すのは、それらの道具に敬意を払うお世辞に過ぎない。国を堅固にし外敵を防ぐには、それなりの方法がある。仁義にかなった人物は自然と味方が多いので勃興し、仁義に合わない人物は味方が少ないので滅亡する⑤、それらの道具のせいではない。

右は安陽王、甲辰【前257】から癸巳【前208】までの合計五十年間である。

「大越史記外紀全書」巻一 終わり⑥

【注8】

①有幸降神 『春秋左氏伝』 莊公三十二年の伝に「秋七月、有神降于莘。惠王問諸内史過曰“是何故也”。対曰“国之将興，明神降之。監其徳也。将亡，神又降之。觀其悪也。故有得神以興，亦有以亡”（秋七月，神有り莘に降る。惠王 諸を内史過に問いて曰わく“是れ何の故ぞ”と。対えて曰わく“国の将に興らんとするや，明神 之に降る。其の徳を監るなり。将に亡びんとするや，神又た之に降る。其の悪を觀るなり。故に神を得て以て興る有り，亦た以て亡びる有り”）」とある。

②石能言 『春秋左氏伝』 昭公八年の伝に「八年春，石言于晋魏榆。晋侯問於師曠曰“石何故言”。対曰“石不能言，或馮焉。不然，民聽濫也。抑臣又聞之。曰‘作事不時，怨讒動于民，則有非言之物而言’”（八年春，石 晋の魏榆に言う。晋侯 師曠に問いて曰わく“石 何の故に言う”と。対えて曰わく“石 言う能わず，或いは馮らん。然らずんば，民の聽 濫るなり。抑いよ臣又た之を聞く。曰わく‘事を作す時ならず，怨讒 民に動けば，則ち言うに非ざるの物有りて言う’”と）」とある。

③如神有… (4) 【8】 ①に引いた『春秋左氏伝』 莊公三十二年伝の続きに「内史過往，聞虢

請命。反曰“虢必亡矣。虐而聽於神”。神居辛六月，虢公使祝宓・宗区・史囂享焉，神賜之土田。史囂曰“虢其亡乎。吾聞之，‘国將興，聽於民。將亡，聽於神’。神聰明正直而壺者也。依人而行。虢多涼德，其何土之能得”（内史過^ゆ往き，虢命を請うと聞き，^{かえ}反りて曰わく“虢必ず亡びん。虐にして神に聴く”と。神辛に居ること六月，虢公祝宓・宗区・史囂をして享せしむ，神之に土田を賜う。史囂曰わく“虢は其れ亡びん。吾れ之を聞く‘国の將に興らんとするや，民に聴く。將に亡びんとするや，神に聴く’”と。神は聰明正直にして壺なる者なり。人に依りて行う。虢は涼徳多し，其れ何ぞ土の能く得ん”と）」とある。

④伯有為厲『春秋左氏伝』昭公七年の伝に「鄭人相驚以伯有，曰“伯有至矣”，則皆走不知所往。…其明月，子産立公孫洩及良止以撫之，乃止。子大叔問其故。子産曰“鬼有所歸，乃不為厲。吾為之歸也”（鄭人相い驚かすに伯有を以ってし，“伯有至る”と曰わば，則ち皆な走りて往く所を知らず。…其の明月，子産は公孫洩及びに良止を立て以って之を撫し，乃ち止まる。子大叔其の故を問う。子産曰わく“鬼歸する所有れば，乃ち厲を為さず。吾れ之が歸を為すなり”と）」とある。

⑤得道者…『孟子』公孫丑下に「得道者多助，失道者寡助（道を得る者は助け多く，道を失う者は助け寡し）」とある。

⑥大越史記… 陳本は大越史記全書外紀卷之一終につくる。正和本は大越史記外紀全書卷之一終につくる。孫本はこの一行を欠く。正和本にしたがう。

※これはJSPS 科研費・基盤研究（C）「ベトナム漢文学の研究」課題番号：JP21K00468の助成をうけたものである。